



学校だより

たちばな

2022年11月30日

尼崎市立立花小学校
校長 植木 加代子

だれもが かけがえのない一人ひとり

師走になりました。その名のとおり、先生たちの心のメトロノームは速くなっています。中東の国カタールではサッカーワールドカップが開催中で、特に本市出身選手の活躍で尼崎が一層熱く盛り上がっています。彼は小6の時に「絶対に世界で活躍する！」と私の前で強いまなざしで言い切って、その夢を有言実行で実現させています。それより思いを馳せるのは、10代で欧州に渡りプレーする中で生活も含め、きっと想像も及ばない苦労や屈辱も味わったでしょうに、強気な言葉を終始口にしながら自分を奮い立たせる姿勢を貫き、勇気や元気、夢や希望を与える仕事をしていることです。そのことから、口に出したとおりに実現するという意味の“言霊（ことだま）”という言葉の思い出しました。悪口やネガティブなことは口に出さず、同じことでもうまく言い換えて言葉にして口に出しながら、よい循環をつくりたいものです。

12月10日は人権の日です。本校では今週を人権週間とし、様々な取り組みをしています。職員室前の廊下には、各学年の掲示があります。自分のよさや友達のよさにあらためて気づき、その温かい気持ちが表わされています。ところで11月24日には被爆語り部の会の方の講話を6年生が聞きました。11歳の時に被爆した際の壮絶な体験を、制作された紙芝居を見ながら聞きました。焼け跡からお母さんの骨を拾い集めたというお話と「家族を大切に」とのメッセージをいただいたことは、子どもたちも私たちも心に強く刺さりました。人権の話題になぜ突然戦争体験の話がと思われたと思います。「世界人権宣言」を採択した国連は、ヒロシマやナガサキの悲劇を生んだ第二次世界大戦をきっかけに、二度と戦争の惨劇は繰り返さないという強い反省から結成されました。“全ての国で全ての人が生まれながらにもつ人権”を守るためには、各国が協力し努力しなければならないとの決意からです。最も人権を踏みこむものは戦争なのです。このことを、語り部の方は体験談として次代に伝えてくださいました。

また、辛く悲惨なのは「いじめ」です。突然始まることはなく、必ず土壌があり、空気があり、芽があります。それらを見逃さず、声かけや適切なかわりができるよう大人たちがアンテナを高くすると同時に、お互いはいじめを許さない、いじめをするのは人として恥ずかしいという心を、子どもたちが一人残らずもつことが重要です。いじめ防止対策推進法もできました。いじめが許される理由はどこにもありません。どの子も心配する家族がある大切な一人ひとりです。朝会での人権講話では毎年本を紹介しています。今年は『子ども六法』と『きみのことがだいすき』を紹介しました。また、図工展が終わるとすぐに立花ジャンプチャレンジが全校で始まりました。休み時間に全学級学年が熱心に長なわの練習をする姿にいじめやトラブルを生まないよう次の目標をつくってくれる先生方の思いを嬉しく思いました。本校は今年度の主な行事もほぼ無事終わることができましたので、次の学年やその先の将来の自己実現につながる学びに向かう環境づくりに注力していきます。幼保小連携や150周年を感じて過ごすコミュニティスクールも子どもの成長につながっています。その学びの環境も、子どもの特性に合わせて専門家を含めて家庭と連携し、可能な限りオートクチュールな対応に努めています。生活アンケートやアセスも確認と聞き取りをチームとして共有し、一見元気そうな子どもの悩みや困り感に気づくよう努めています。「学校に知られたくない」と思われる悩みもあるかもしれませんが、そういう悩みこそ少しでも早く手立てが必要である場合が多いです。学校には守秘義務があります。ささいなことでも、どの職員にでも構いませんので、ご相談ください。子どもたちにも、同じSNSでも公的機関に相談できるようポスターやチラシを掲示し、呼びかけています。

話は戻ります。今や日本の代名詞ともなりつつある「後片付けと掃除」そして「謙虚で感謝を示す態度」についてです。サッカー日本代表チームの使用後の整ったロッカールーム。折り鶴とともに“ARIGATO（ありがとう）”のメッセージ。サポーターによる観客席のゴミ拾い。サッカーだけではなく。野球メジャーリーグで二刀流の活躍をしている大谷選手も、折れたバットを拾うなどの姿が賞賛されていますが、掃除による気づきや感謝こそが自分を本当に強くする、と実感したと言います。立花小学校も“心を整え、埃（ほこり）を払い、誇りを育む”清掃活動を、これからも大切にしていきます。

寒さが厳しく、暗く長い冬の後ほど、訪れる春の花は、一層鮮やかに咲きほこる。人生も同じ。春を信じて冬（辛いこと）を乗り越えましょう